

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「三題噺」の教材からとらえた子どものイメージの動き方
Author(s)	須崎, 恵子
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 44 - 45
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045157
Right	
Relation	



「三題噺」の教材からとらえた 子どももののイメージの動きき方

須崎恵子

1、三題噺

三歳から五歳の幼児を対象に知能教育を行っている英才教室の課題の一つに「三題噺」というものがあります。たくさんの絵カードの中から三枚を選び、その題材を盛り込んだまとまりのある話を考えさせる課題です。

絵カードは、家庭の中にあるもの、郊外にあるものなど子どもがよく目にするものの絵を一〇〇枚用意しました。子どもたちは、そのカードの中から話を作れそうな三枚を任意に選んで台紙にのせ、その三枚の絵（概念）を盛りこんでお話しをします。

子どもたちの反応は様々でした。カードの前でさんさん迷って話を十分組み立ててから話をしに来る子、次から次へとカードをもって来て短い話をたくさん作る子、いそいでカードを持ってきて、ことばを選んで長い話をまるで物語をするように語る子など、取り組み方はいろいろでしたが、皆たいへん意欲的で、お話を一つも作れない子は一人もいませんでした。また、三つ

のクラス十一名で実施しましたが、一人として他の子と同じ話を作った子もいませんでした。皆、短いお話ですが、まるで自分の見た夢を語るように一つ一つのお話をしてくれました。その、子どもたちが話してくれた三題噺を、子どもたちが話した通りに記録をしました。四歳女児三名、五歳女児六名男児二名計十一名で、記録ができた話は四十九例でした。

2、年齢による違い

子どもたちが作った三題噺をいくつか挙げてみます。線は、選んだ三つの絵カード（題材）を示します。

- ①お父さんがお友だちにでんわして、でんわおわったら外に出て、空を見上げたの。 (四歳女)
- ②女神がくつをはいてさんぼして、ちよつとあつくなつたので、木の下に入ってあそんだ。 (四歳女)
- ③雪だるまがあついとこへ行きたいと言つてあついとこ(海)へ行つたらとけちゃつたの。男の子が夜、ドアをあけて雪だるまを探したらいなかつたの。 (四歳女)

たの。 (四歳女)

- ④男の子がさんりん車で、お山の方でかけようと思つたので、さんりん車でお山の方でかけました。 (四歳女)
- ⑤動物たちがおしゃべりして、おにごっこするときに、かばさんがおにで、ぞうさんとさるさんはかくれたの。 (四歳女)

- ⑥家でテレビを見てたら、でんわがかかってきて、テレビがおわつちやつたの。 (五歳女)
- ⑦お父さんが山へ行つて、おにぎりを食べた。 (五歳女)

- ⑧おまわりさんが来て、まよつた子に道を教えてあげた。一人で帰つてきたからつて、このロボットをかつてもらつた。 (五歳男)
- ⑨お父さんが、すくはやいてんと虫がつかまえられたらアイスクリームをかつてくれると言つたから、その子どもがでんと虫をつかまえて、アイスクリームをかつてもらつた。 (五歳男)

- ⑩お母さんが犬のポチにお肉をあげて、おなかがいっぱいになつた犬は、

男の子といっしょにあそんだ。 (五歳男)

子どもたちのお話を聞いて、まず興味深く思つたのは、四歳児と五歳児では話のし方に違いがあるということでした。子どもによつて差はあるのですが、少なくとも今あげた例からみますと、四歳児のお話はイメージが先行しているといえるでしょう。彼女たちは、三つの題材を入れるということより、三つの絵から広がつたイメージを語ろうとしています。三つのものではなく、頭に浮かんだ情景が動くのをそのまま語っています。③や⑤などはそれが一つの物語になつているといえるでしょう。このように四歳児が現実的でない夢のような世界を語るのに対して、五歳児は現実的な話を作ることが多かつたようです。四歳児がイメージを先行させているのに対し、五歳児はことばを先行させているように思えます。三つの題材をうまくつなぎあわせるためにイメージを使つている感じがします。或は、五歳児になると型にあてはめて考え始めるのかもしれない。⑥や

⑦などはとても現実的な話ですが、これを作った子たちは、はじめはなかなか話ができませんでした。ところが、一度あてはめ方がわかると、その話のパターンを活用して、次々と話を作っていました。

また、⑧⑨⑩などはかなりイメージがふくらんでいる印象を受けますが、四歳児のふくらませ方と少しちがうような気がします。四歳児では、主観的にとらえてイメージの中に没入しているのに対し、五歳児では一步離れて客観的にイメージを追っているように思われます。予めいくつかの場面の絵があつて、それをめくりながら話しているような感じを受けます。実際、話をする時も「よく聞いてよ。」と言わんばかりに構えて話を始めた子たちです。

3、お話し作りのパターン

次は、子どもたちが、選んだ三つの題材をどのようにつなげてお話を作つたか、お話し作りのパターンを見てみたいと思います。

A (a, b, c) 豆つぶ型

- ⑦おやつにコーヒーとおちゃとりんごを食べた。(五歳女)
- ④お兄ちゃんが机をかってもらつて、教科書とえんぴつで勉強した。(五歳女)

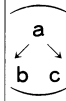
三つあるいは二つの題材を並列の関係でとり入れている例です。題材を選ぶ時、同類を集めるのはわかり易いですが、同類の三つを並べた話は作りやすいついていたわけですが、こうした例は少なく、四十九例中(a, b,

c)と三つを並べた話は三例、(a, b)(b, c)と二つを並べた話は前者が二例後者が六例で、計十一例でした。これは、子どもたちのイメージには動きがあり、列挙する形でその場にとどまるより、次々とイメージが動いていくためではないかと思えます。しかし、それではこの型ではイメージが停滞しているのかというと、そうではないようです。

- ⑦男の子がおやつにチョコレートとケーキとあめを食べて、歯をみがかなかつたので虫歯になつた。(五歳女)

「男の子がaとbとcを食べた。」これで終了してもよいはずなのです。ところが、うしろに何か因果関係をもつたお話をつなげなくては気がすまないようです。このようにどんどんイメージを伸ばしていくエネルギーを、子どもたちは持っているようです。前述の⑤などもその一例といえると思います。

B、牛のお乳型



- ④あかちゃんがひこうきを作つて、おばあちゃんにおくつた。(五歳女)
- ④お父さんが山へ行って、おにぎりを食べた。(五歳女)

「aがb、そしてaがb。」と時間の流れがあり、順接の関係で結ばれた型です。前述の①②⑥などもその例で、この型は十五例見られました。「あかちゃんがひこうきをおばあちゃんにおくつた。」「お父さんが山でおにぎりを食べた。」でもお話になるのです。しか

し、子どもたちは、ひこうきを作つてからおばあちゃんにおくつり、お父さんが山に行つてからおにぎりを食べる、と話の流れをもつて見ているところが興味深いと思います。

C、a + b || c たし算型

- ④手紙がどいて、おもしろい話だから笑つてる。(五歳女)
- ④手にたまごをもつていて、われちやつたからそうじきです。(五歳女)

「aがb、だからc。」というように、「だから・なので」などを入れて原因と結果をあらわし、話をまとめている型です。これには、前述の⑧などaとbがつつて原因となりcに結びついている例も入れました。これも十五例で、多く出された型です。まとまつたお話をつくらうと考えた時意識する一つの型なのかもしれません。

D、a ↓ b ↓ c いもづる型

- ⑦すべり台でまずあそんで、ボールでこんどはあそんだ。そしてどろんこになつてうちにかえつて、せんたくきであらつてもらつた。(五歳男)

「aしてbして……」と直列型で話をつづけていくパターンです。日記を書く時、「今日はaしてbして次にcして」と生活行動の一つ一つを羅列するのと似ています。この型も意外に少なく、五例でした。題材にある程度同類

のものを求める必要があるもので、Aと同様、同種類のカードからはイメージが動きにくいのかもしれません。

E、a ↓ c やっぱりこつち型

- ③女の子が、ずばんにしようと思つたけどスカートにしたの。(五歳女)

「けど」を使って話を作つた例は、これ一例でした。前文節と後文節に分け「ししようと思つたけど。」と逆接でつなげています。

また、ずばんをはいてみたけどやめてスカートにしたのではなく、ずばんにしようと思つたけど、と考えている内容に題材を入れている点にも注目したいと思います。

AからEまで、パターン別に見てきましたが、個人別に作つたお話を見てみると、その子のくせや個性がよくでていると感じたことをつけ加えておきたいと思います。表現のし方や言いまわしに、その子らしさを感じ、どこにこだわるかも見えてきます。いろいろな話を作つても題材の結びつけ方は同じパターンにしばられる子が多いのですが話はあまりたくさん作れなくても多くのパターンで話をつくる子もいました。また、パターンで分けた以外の部分、つまり題材と関係ないが、どうしてもつけたしてしまう部分があるのも特徴的でした。題材によつても、イメージの動き方に違いが見られるかと思いますが、今後の課題したいと思います。